

地域振興施設（道の駅）基本計画の概要

1 基本計画の概要

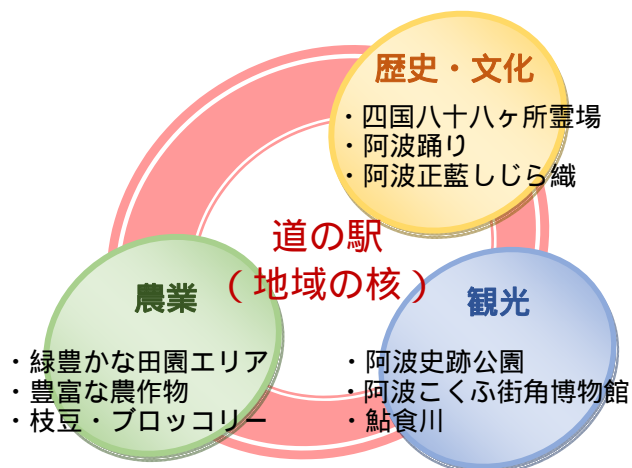
1.1 地域振興施設（道の駅）整備の目的

国府地区は、水と緑あふれる豊かな田園環境と、四国八十八ヶ所霊場のうち 3 つの札所を有するなど歴史・文化を合わせ持つ地域であり、都市計画マスタープランにおいても、同地区のまちづくりの方針として「地域の歴史や文化、癒しを育むまちづくり」が示されている。

また、国府地区は徳島南環状道路の開通に伴い、大幅な交通量の増加が予想され、生産と需要を結びつけた都市と農村の交流による流通ルートの多様化が期待できるとともに、地元ブランドの確立、地産地消の展開、及びこれらによる地域経済・雇用の活性化・観光客の誘致にも期待できる。

本計画においては、当該地区の特色を踏まえ、地域振興施設が「観光」「歴史・文化」「農業」という異なるコンテンツを結びつける役割を果たす核となり、地域振興施設があらゆる人々との交流を通じて、地域に新鮮な風を呼び込むとともに、まちづくりの意識向上を図り、新しい魅力を創出することで、地域活性化と観光振興の拠点となる施設整備を目指す。

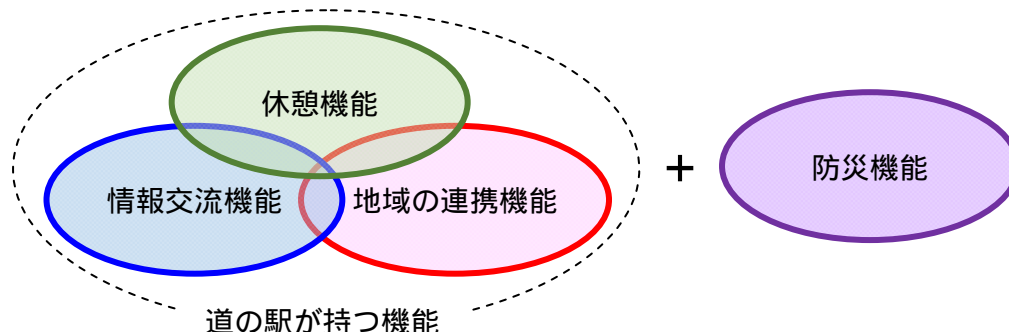
加えて近年、東南海・南海地震発生が危惧されているなかで、地域振興施設は防災拠点としても地域住民の安全確保の役割を担うものであり、設備・情報・人材・物資の集積等の機能を備えた施設整備が重要である。



1.2 計画策定における基本方針

1.2.1 地域振興施設（道の駅）の基本的な機能

今回計画する地域振興施設は、道の駅が持つ 3 つの基本機能に防災機能を加えた施設とする。



(1) 休憩機能

利用者がいつでも自由に休憩し、清潔なトイレが利用できる快適な休憩施設を設ける。

(2) 情報交流機能

人と人、人と地域との交流により、地域の魅力を知ってもらうとともに、地域振興を図れ

るように、人・歴史・文化・風景・産物等の地域に関する情報を提供する場を設ける。

(3) 地域の連携機能

地域が一体となって地域振興拠点をつくとともに、地域と地域が地域振興拠点を軸として協力するなど、地域内、地域間の連携の場を設けることで「地域振興拠点」の整備を契機とする広域的な連携と交流により、活力ある地域づくりが促進される。

(4) 防災機能

周辺地域の防災拠点として災害時の道路通行者の避難所、また地域住民のための防災拠点としての機能を備える。

2 整備方針

2.1 地域振興施設(道の駅)整備の方針

国府町は、緑豊かな田園風景を背景に、四国八十八ヶ所霊場を有するなど歴史と文化を合わせ持つ特徴的な町である。

計画する道の駅は国府町の個性と魅力を浮き彫りにする独自のコンセプトにより、地域の素晴らしさを理解してもらい、人々に感動を与えるまちの顔となる施設を目指すとともに、都市住民と地元住民が触れ合う交流の場として、生活の質の向上に努め、まちの創造や誇りに繋がるシンボルとして位置づけされることが期待される。

2.1.1 地域振興施設(道の駅)整備における課題認識

本施設の検討にあたり、以下の課題が考えられる。

【課題1】

計画プロセスにおける合意形成

- ・成功するためには、地域住民のやる気を引き出し、地域住民自身が積極的に関わっていく姿勢が必要。
- ・地域住民の思いや自由な意見、アイデアを引き出し、計画に取り入れることが必要。

【課題2】

地域資源の有効利用

- ・都市近郊の立地特性を活かし都市住民に観光資源や地元産業・農産物等に関する情報発信が必要。
- ・周辺に道路休憩施設がないため、誰にでも利用可能な道路休憩施設の整備が必要。

【課題3】

地元貢献施設の実現

- ・地域住民が自主的に活動できる場を提供し、収入源となり地域が元気になるための施設が必要。
- ・災害時に地域住民を支援することができる施設整備が必要。

【課題4】

事業収支の成立

- ・整備コストを抑えるために、施設は建設費や維持管理費を抑えた身の丈にあった計画が必要。
- ・地域住民が日常的に利用でき、かつ都市住民との交流により安定的に収益がでる仕組みが必要。

2.1.2 地域振興施設(道の駅)の整備コンセプトに対する視点

地域振興施設整備における課題を踏まえ、以下のような視点をもとに整備コンセプトを設定する必要がある。

【視点1】地域住民が喜び、都市住民との交流を通じた地域活性化を支援する施設計画

【視点2】観光資源や市街地近郊という計画地の特徴を最大限に活かした施設計画

【視点3】長期にわたり、安定的に運営できる事業スキームの検討

2.2 地域振興施設(道の駅)に求められる機能

地域振興施設に求められる主な機能として、以下のような機能が考えられる。

そこを訪れる目的・滞留・滞在を促す地域振興拠点の機能

地域の特色を活かした地産地消、食育等の実践や啓蒙の場

農商工が連携して6次産業などに取り組むための地域活性化拠点

特産品の研究開発所、地場産業のPR・アンテナショップ機能

お遍路、道路通行者、観光客等におもてなしをする休憩所

まちを紹介するセールス機能、地域住民及び都市住民に向けた情報受発信機能

高齢者が元気に働き続ける生きがいづくりや、若者定住促進に繋がる事業の展開

災害発生時の避難所として、情報やトイレ、食などの供給機能と災害支援備蓄機能

その他、まちの活性化機能

3 論点整理

道の駅整備を取り巻く課題

(1) 周辺観光における課題

- ・ お遍路をはじめとする観光客の休憩場所がない
- ・ 観光バス用の駐車場がなく、国道に待機している
- ・ 周辺に食事を取れる場所が少ない
- ・ 通過観光が主となり、滞在時間の延伸が図れない
- ・ 観光客は農作物を土産物として持ち歩けない

(2) 農業における課題

- ・ 輸入農作物の増加やデフレの影響による農林産物の価格低迷
- ・ 食の安全・安心に対する関心の高まりと地産地消の推進
- ・ 体験農園など多様化する顧客ニーズへの対応
- ・ 農業従事者の高齢化と担い手の減少
- ・ 農林産物のブランド化による商品力の向上と栽培品種の多様化

(3) 地域振興・防災における課題

- ・ 道の駅出店農家のサポート体制
- ・ 地域の魅力を共有・情報発信できる場所がない
- ・ 災害時のドライバーの受け入れ、避難場所や支援物資の拠点施設がない

論点 整備コンセプトの設定

- ・ 「こんな道の駅にしたい」という思いを具現化していくために、関係者で共有できる目標設定が必要であり、それに見合った施設規模、導入機能の整理を行う必要がある。
- ・ 「道の駅」の利用者にとって楽しみなのは、その土地、地域ならではの歴史・文化に触れること。最も話題となるのは、その土地特有の「食」と「産物」の発見であり、食に対する期待度は高く道の駅に立ち寄る重要な要因の一つとなっている。

【議論のポイント】目指すべき道の駅像、実現に向けた具体的な展開

論点 誰をターゲットにするのか(対象とする顧客のイメージ)

- ・ 国府の道の駅は、地域の方々に愛され、日常的に利用いただきたいという願いを込め、生活者（地域住民、徳島市民、近隣市町村民）をターゲットとする。
- ・ さらに国府町を訪れるお遍路さんや観光客に一時の安らぎの場を提供することを考え、地元の方と同様にターゲットとしてくつろぎの場と国府町らしさを提供する。

【議論のポイント】メインターゲットを中心にしたサービス展開、導入機能の抽出

論点 道の駅整備に必要な機能

- ・ 国府地区は、阿波史跡公園や四国八十八カ所霊場等の歴史的資源、豊富な農作物や工芸品等の特産物が存在し、お遍路さんを中心とした多くの観光客が訪れている地域。
- ・ 将来的には徳島西環状道路・徳島南環状道路が開通することにより、大幅な交通量の増加や観光客の増加が見込まれる地域でもある。
- ・ 道の駅の3つの基本機能のほか、災害時における避難場所や支援物資の拠点等「防災機能」を併せ持つ、地域活性化や防災拠点の拠点として活用することが期待される。

【議論のポイント】将来的な地域像、地域活性化や防災に関して求められる基本機能

論点 道の駅施設の運営

- ・ 地域振興施設の中には、産地直売所、レストラン、加工・販売所など、集客施設が設置されることが多いが、これらの施設をどのように運営していくかにより、目指すべき整備プランは大きく異なる。
- ・ 道の駅が活気づくためには、地域の方が積極的に道の駅に関わっていくことが重要であり、施設運営者が主体的に取り組む必要がある。
- ・ 地域住民に施設運営のノウハウがないケースがほとんどであり、実際に施設を運営するにあたり、運営経験豊富な方の指導を得たり、専門家を運営組織に迎え入れたりするなど、運営をバックアップしていくサポート体制が必要。
- ・ 施設運営体制をどのように構築していくか、道の駅運営に参加したい方、出店したい方をどのように受け入れていくか、基本的な仕組みづくりが必要。

【議論のポイント】施設運営体制の構築、施設運営のサポート体制の仕組みづくり